

平成 21 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006-2008
課題番号：18520224
研究課題名（和文） プルーストと絵画の歴史的背景に関する総合的研究
研究課題名（英文） Synthetic study on the historical background of Proust and paintings
研究代表者
吉川 一義 (YOSHIKAWA KAZUYOSHI)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：30119870

研究成果の概要：プルーストの絵画受容の歴史的背景について、等閑視されてきた当時の美術専門書（とくにローランス版「大画家シリーズ」）や、社交サロンの絵画コレクションの重要性など、その実態を総合的に明らかにすることにより、『失われた時を求めて』の成立過程に新たな解明をもたらし、フランス文学史の革新、文学史と美術史の交流に寄与することができた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	540,000	3,740,000

研究分野：フランス文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：プルースト、絵画、歴史的背景

1. 研究開始当初の背景

(1) 『失われた時を求めて』の作家プルーストと絵画の関係は、比較的良好に研究されてきた分野である。Juliette Monnin-Hornung の総合的研究 *Proust et la peinture* (1951) をはじめ、同主題に関する展覧会カタログ *Proust et les peintres* (1991)、吉川の『プルースト美術館』(1998) などの研究が出ている。

(2) これらの研究では、作家が美術を受容した歴史的背景（環境）、とくに当時の美術館の実態、企画された美術展、社交界の私的コレクションなどは体系的に調査されていなかった。本研究は、これらの欠落を

補うために構想されたものである。

2. 研究の目的

(1) プルーストが受容した当時の美術館の実態、企画された美術展、社交界の私的コレクションなどは体系的に調査する。

(2) 作家が見ていた可能性のある美術専門書や展覧会カタログを網羅的に調査し、当時の図版による美術受容の実態を明らかにする。

(3) このような美術受容のありかたが『失われた時を求めて』における絵画の提示にどのような影響を与えているかを考察する。

(4) 『失われた時を求めて』の芸術理念

を当時の文化状況に位置づける。

(5) 小説成立過程の解明により、文学史の革新、文学史と美術史の交流を目指す。

3. 研究の方法

(1) 『失われた時を求めて』とその関連作品、『ブルースト書簡集』、フランス国立図書館所蔵のブルースト資料マイクロフィルムを読み直し、『失われた時を求めて』校訂版の索引、『ブルースト書簡集総合索引』などを活用して、そこにあらわれた絵画の歴史的背景に関する情報を抽出する。

(2) ブルーストが見ていた当時の美術館や展覧会、私的コレクション、美術をめぐる専門書や論文を精査し、小説との関連を考察する。

(3) これら美術をめぐる情報がいかに『失われた時を求めて』に取り込まれたかを実証するため、フランス国立図書館が所蔵する草稿帳、メモ帳、清書原稿、タイプ原稿、校正刷などを精査し、作品の成立過程を克明に明らかにする。

(4) 内外の学会や専門誌に成果を発表する。

4. 研究成果

(1) 作家が見ていた当時の美術館や展覧会、私的コレクション、美術をめぐる専門書や論文などについて、総合的な調査ができた。

(2) これらの美術受容を作家がどのように『失われた時を求めて』に取り入れたかを解明するため、フランス国立図書館が所蔵するブルーストの草稿、タイプ原稿、校正刷などを調査して、小説の成立過程を具体的に明らかにするよう努めた。

(3) 以上の調査研究により、ブルーストが足繁く出かけていた当時の美術館や展覧会、これまで注目されなかった当時の美術専門書（とくにローランス版「大画家シリーズ」）や、作家が出入りしていた社交サロンの絵画コレクションが小説成立にきわめて重要な役割を果たしていることが明らかになった。

① 現在のような美術館がヨーロッパ各地に整備されたのは十九世紀の後半である。ブルーストが訪れた美術館にかぎるとしても、ルーヴル美術館がその所蔵品を毎日、広く一般の愛好家に公開するようになったのは1855年にすぎない。若いブルーストはそこで世紀末にシャルダンやレンブラントの傑作を鑑賞し、未来の小説の萌芽となる芸術に関する省察を書きつけた。ヴェネツィアのアカデミア美術館の場合、現在のような偉容が完成したのは、ひとえに1895年からの拡張工事に

よる。この工事のおかげでカルパッチョの「ウルスラ伝」連作も同美術館に収蔵されることになった。作家がアカデミア美術館を訪ねたのはその直後の1900年で、カルパッチョの代表作が『失われた時を求めて』において重要な役割を果たすのは、このような美術館整備のおかげである。

② 官展の衰退とともに、現存作家が画を展示する場は、むしろ画廊にうつる。ブルーストも、印象派を売り出したデュラン=リュエル画廊やベルネム=ジュンヌ画廊に頻繁に出入りしていた。とくにデュラン=リュエル画廊はお気に入り、そこでモネの展覧会をくり返し見ていた。1895年の「ルーアン大聖堂」連作をはじめ、1900年の「睡蓮の池」連作や、1909年の「睡蓮一水の光景」48点（これはブルーストが見たという確証はないが、関心を寄せていたことは間違いない）をへて、1904年には「テムズ河光景」を鑑賞している。またベルネム=ジュンヌ画廊では、1912年の「モネーヴェネツィア展」に展示された20数点を見ている。これらの展覧会で見たモネの画が、コンブレーの睡蓮の描写や作中画家エルスチールのヴィジョン成立に多大の貢献をした。

社交界貴族たちは、過去の巨匠たちの大回顧展をも企画し、社交界のネットワークを駆使してヨーロッパじゅうから作品を集めた。その典型が、1898年の秋、アムステルダムの市立美術館で開催された大規模なレンブラント展である。ブルーストはアムステルダム展とルーヴル美術館所蔵のレンブラントの画を比べて、先駆的な画家論を書き、『失われた時を求めて』で展開される美学の基礎を築いた。また一九〇二年十月にはベルギー・オランダ旅行に出かけた。その動機はブリュージュ（ブリュッヘ）で開催されていた「フランドル・プリミチフ派展」を見るためだった。実際そこで鑑賞したブリュゲルの『ベツレヘムの人口調査』が作中の『ゲルマントのほう』の描写に活かされる。

さらに1921年の春、パリのジュ・ド・ポム美術館で開かれたオランダ派絵画展では、あろう。そこに出品されたフェルメールの『デルフトの眺望』が、『囚われの女』のなかでベルゴットが死ぬ有名な場面の背景として使われる。

③ ブルーストが参照して当時の美術書では、ラスキン全集の図版の重要性がとくに指摘されているが、本研究ではローランス版「大画家シリーズ」が作中にふんだんに使われていることを明らかにした。

作中でオデットの風貌がボッティチェリの描く女性にたとえられるくんだりではルネ・シュネデールの『ボッティチェリ』、ブ

ロックがメフメト2世になぞらえられる箇所ではローランス版ガイドブック「著名芸術都市」シリーズ（「大画家」シリーズの姉妹篇）の『ヴェネツィア』、作中で「ヴァトーの習作紙片」が問題となる時はセアイユの『ヴァトー』が使われるなど、「大画家シリーズ」は作家が小説に美術を取り入れるさいの不可欠な参考文献となった。

④ 『失われた時を求めて』に美術が導入されるにあたり、当時の社交サロンのコレクションも重要な役割を果たした。そのなかにはモローを収集したシャルル・アイエム、ストロース夫人、モネやマネを集めたシャルル・エフリュッシュ、ルノワールの収集家ジョルジュ・シャルパンチエ、グレコを所蔵していたマドラッヅ家、フェルメール1点を秘蔵していたロドルフ・カーン、モネの「ルーアン大聖堂」連作4点を所蔵していたイザアック・ド・カモンド伯爵など、『失われた時を求めて』で大きな役割を演じる画がふくまれている。

（4）また作中での絵画提示の意味と作家の偶像崇拝的な美術受容についても、総合的な考察を加えた。その結果、プルーストが批判した偶像崇拝的な美術趣味がかえって『失われた時を求めて』の魅力あふれる描写の基礎になっていることが判明した。

（5）これらの研究成果を京都、東京、パリ、トゥール、ミュンスター、カブルでの学会やシンポジウムで口頭発表するとともに、その一部を論文として専門誌に発表した（それぞれ「雑誌論文」と「学会発表」の項を参照）。また、これらの成果を『プルーストと絵画』（岩波書店、2008年）にまとめるとともに、プルーストと絵画に関する総合的な考察をフランス語にまとめ、原稿を出版（Champion）に渡すことができた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

[雑誌論文] (計 8件)

- ① Kazuyoshi Yoshikawa, « La correspondance de Proust et l'utilité de son index », *Correspondances et manuscrits*, n° 1, p. 101-110, 2007, 査読無.
- ② 吉川一義, 「プルースト小説の誕生」, 『現代文学』 75号, p. 9-18, 2007, 査読無.
- ③ Kazuyoshi Yoshikawa, « L'idolâtrie artistique chez Proust », *Marcel Proust*, n° 6, p. 49-63, 2007, 査読無.
- ④ Kazuyoshi Yoshikawa, « Proust et Rembrandt », *Marcel Proust*, n° 6, p.

105-120, 2007, 査読無.

- ⑤ 吉川一義, 「プルーストとフロイト」, 『フロイト全集』 月報 6, p. 1-4, 2007, 査読無.
- ⑥ 吉川一義, 「プルーストとニジンスキー」, 『時代を着る』, n° 1, p. 162-171, 2008, 査読無.
- ⑦ 吉川一義, 「スワンの美術趣味の執筆過程」, 『現代文学』 77号, p. 25-39, 2008, 査読無.
- ⑧ Kazuyoshi Yoshikawa, « Proust aux expositions », *Proust et les moyens de la connaissance*, p. 207-218, 2009, 査読無.

[学会発表] (計 13件)

- ① 「プルーストと絵画コレクター」, 追悼シンポジウム「吉田城先生とプルースト」, 京都大学, 2006年6月24日.
- ② 「プルースト—批評から創作へ」, 科研費報告会, 京都大学, 2006年12月16日.
- ③ « *Du Contre Sainte-Beuve à la Recherche du temps perdu* », séminaire d'Antoine Compagnon, Collège de France, 20 mars 2007.
- ④ « Proust et l'impressionnisme », Université de Tours, 21 mars 2007.
- ⑤ « Manet et les impressionnistes dans les salons de la *Recherche du temps perdu* », séminaire de Pierre-Edmond Robert, Université de Paris III, 23 mars 2007.
- ⑥ « Proust aux expositions », colloque « Proust et les moyens de la connaissance », École normale supérieure (boulevard Jourdan), 10 mai 2007.
- ⑦ « La genèse de la *Recherche* par la correspondance », colloque « La Correspondance de Marcel Proust », Université de Münster, 22 juin 2007.
- ⑧ « Proust et la peinture », journée consacrée au « Balbec normand de Marcel Proust », Grand-Hôtel de Cabourg, 24 juin 2007.
- ⑨ « Proust et la peinture : approches génétiques », colloque « Comment naît l'œuvre littéraire », Institut franco-japonais du Kansai, Kyoto, 9 décembre 2007.
- ⑩ « Genèse des matinées dans *La Prisonnière* : fragments, montage, éclatement », colloque « Brouillons de Proust », École normale supérieure (rue d'Ulm), 21 mars 2008.
- ⑪ « Les goûts artistiques de Swann : approches génétiques », Société japonaise d'études proustiennes, Université Aoyama, Tokyo, 24 mai 2008.
- ⑫ « Proust et ses amis collecteurs de tableaux », colloque « Proust et ses amis », Fondation Singer-Polignac, Paris, 8 novembre 2008.

⑬ «Idolâtrie et originalité artistiques chez Proust», Université de Tours, 5 mars 2009.

〔図書〕(計 3件)

①吉川一義、『ブルーストと絵画—レンブラント受容からエルスチール創造へ』、岩波書店、380p.、2008.

②Marcel Proust, *Cahiers 1 à 75 de la Bibliothèque nationale de France*, comité éditorial : Nathalie Mauriac Dyer, Bernard Brun, Antoine Compagnon, Pierre-Louis Rey, Kazuyoshi Yoshikawa; *Cahier 54*, 2 vol, édité par Francine Goujon, Nathalie Mauriac Dyer et Chizu Nakano, Bibliothèque nationale de France/Brepols, 2008.

③吉川一義、岑村傑編、『フランス現代作家と絵画』、水声社、337p.、2009.

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 件)

○取得状況 (計 件)

〔その他〕

(1)研究代表者

吉川 一義 (YOSHIKAWA KAZUYOSHI)

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号 : 30119870

(2)研究分担者

(3)連携研究者